

コロナ禍における地域社会との交流の実際

法人名	国家公務員共済組合連合会
病院名	横須賀共済病院
職種・所属	ブランド推進室長兼看護部次長・ブランド推進室
発表者氏名	千葉由美

【はじめに】

2020年1月にCOVID-19の発生が国内で初めて確認されて以来1年半が経過し、感染は全国に広がっている。感染を抑制するために人々の行動には様々な制約が課せられ、生活全般に大きな影響を及ぼしている。感染者の増加に伴って対応に当たる医療従事者の業務量と勤務時間が増加することに加え、自身の感染への恐怖が医療従事者にとって大きなストレス源となる。さらに世間の人々が抱く感染への恐怖は医療従事者への偏見や差別、誹謗中傷につながり、業務負担以上にストレスが強くなるとも言われている。当院においても「飲食店への入店を断られた」などの事例が職員から報告された。

その一方で医療従事者に寄せられる激励や支援も数多くある。このような困難な時期にいただく支援は医療従事者の強い支えとなり、感謝の言葉を支援者に伝えることで地域社会との新たな交流が生まれた。今回は、その交流が良い循環を生んだ事例を報告する。

【経過】

初めて緊急事態宣言が発令された2020年4月、当院近隣の和菓子店より和菓子150個の差入れをいただいた。困難な時期の予期せぬ支援は最前線で働く職員の笑顔を生んだ。この笑顔と感謝の思いを支援者に伝えたいと考え、「エールの交換」と称して職員の写真に御礼のメッセージを添えた色紙を作成して届けた。

この交流についてテレビの情報番組から取材を受けることとなり、その際に病院長が「医療者と患者さんだけじゃない。市民一体感をもって戦ってほしい」とのメッセージを伝えた。番組放映後、病院への誹謗中傷が目に見えて減少する一方、地域から多くの物的支援と激励の言葉をいただくようになった。

【結果】

エールの交換は当院と地域社会の交流のきっかけとなり、文字通り顔が見える関係づくりにつながっている。地域住民から寄せられる激励の言葉に加え、患者・家族から寄せられる意見の中にもお褒めの言葉が増え、意見全体の約60%を占めるようになった。地域社会や利用者からの信頼感の向上をうかがわせる。

職員にとっては支えてくださる方々の存在を改めて実感する機会となった。職員意識調査の結果では、コロナ禍にも関わらず意欲度・満足度ともに向上している。エールの交換がコロナ診療の困難を乗り越えて通常診療との両立が図れる一助になったと考える。エールの交換は現在も継続している。